

令和6年度民学産公協働研究事業

研究成果報告書

地域における公立美術館についての市民の受容と

コミュニティ形成の可能性

参加と協働推進枠

中嶋厚樹

目次

1. 概要	・・・P 1
2. 研究の目的	・・・P 1
3. 申請団体プロフィール	・・・P 1
4. 協働研究の期間	・・・P 1
5. 研究の背景	・・・P 2
6. 研究方法	・・・P 3
7. 結果と考察	・・・P 3
8. 結語	・・・P 1 6
9. 今後の計画	・・・P 2 1
10. 謝辞	・・・P 2 1
11. 参考文献	・・・P 2 1

1. 概要

我が国において、2022 年博物館法の一部が改正され、博物館に、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動を図り、地域の活力の向上に取り組むことを努力義務とすることが盛り込まれた。

また、近年まちづくりの核として美術館が設置されている都市も増えてきているが、正解のないアートを活用した地域の中でのコミュニティ形成もその一端であろう。

本研究では、アート・コミュニケータとして活動経験のある市民を対象に、三鷹市の文化施設にてフィールドワークを行い、参与観察および聞き取り調査を通じて、文化施設の印象やアートを介したコミュニケーション、コミュニティ形成の可能性についてまとめる。

2. 研究の目的

本研究では、フィールドワークを中心に三鷹市における公立美術館が市民にどのように受容されているのか、また、コミュニケーションを通じて多様な価値観を共有することは、市民の受容にどのような影響があるのかを明らかにすることを目的とする。本協働研究事業は、特定非営利活動法人三鷹ネットワーク大学推進機構定款第4条に定める特定非営利活動のうち、(4) 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動に、関連する。

3. 申請団体プロフィール

申請者 中嶋厚樹（なかしまあつき） 参加と協働推進梓

【略歴】

株式会社スタジオジブリ 学芸員

立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科博士課程前期課程修了 修士(社会デザイン学)

三鷹まちづくり総合研究所まちづくり研究員 第1期

東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」第8期

文化庁ミュージアムエデュケーション研修 修了 第10期

東京藝術大学現代美術キュレーション概論 修了

4. 協働研究の期間

2024年7月1日～2025年2月14日

5. 研究の背景

世界保健機関憲章前文（日本 WHO 協会訳）によると、健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいうと定義され、“社会的にも”満たされるという点で社会的なつながりへの意識が高まっている。2023 年 11 月には、WHO が新たな委員会である「WHO Commission on Social Connection (WHO 社会的つながりに関する委員会)」の設置を発表。2024 年から 2026 年までの 3 年間、孤独・孤立の問題は世界的な公衆衛生の優先課題であるとして、解決を目的とする活動を決定している。

我が国においても、2024 年に「孤独・孤立対策推進法」が施行され、基本理念として、孤独・孤立の状態は人生のあらゆる段階において何人にも生じ得るものであり、社会のあらゆる分野において孤独・孤立対策の推進を図ることが重要であること、当事者等の状況に応じた支援が継続的に行われること、当事者等に対しては、その意向に沿って当事者等が社会及び他者との関わりを持つことにより孤独・孤立の状態から脱却して日常生活及び社会生活を円滑に営むことができるようになることを目標として必要な支援が行われることなどが掲げられている。

孤独や孤立の問題が社会課題となっている中で、「経済財政運営と改革の基本方針 2024～賃上げと投資がけん引する成長型経済の実現～」、いわゆる骨太の方針 2024 では、家族のつながりや地縁も希薄化する中、制度・分野の枠や「支える側」、「支えられる側」という従来の関係を越え、一人一人が生きがいや役割を持つ包摂的な社会を実現することが重要であるといった指摘がなされた。また、具体的には、支援の担い手やつながりサポーターの育成、予防の観点から緩やかなつながりを築ける居場所づくり、人と人とのつながりを生むための分野横断的な連携の促進などの取組を着実に推進する、文化拠点に多くの人が集い、文化芸術を享受し、次代を担う世代への投資を行う好循環を確立するといった指摘がされている。

このような背景の中で、東京都は、2022 年より「東京文化戦略 2030～芸術文化で躍動する都市東京を目指して～」に取り組んでおり、文化芸術の担い手の育成やコーディネーターの育成も重点政策である。

一方で三鷹市では、2024 年、第 5 次三鷹市基本計画において芸術文化の振興として、芸術文化行政の計画的な推進、誰もが芸術文化に触れられる機会の提供、多くの担い手による芸術文化活動の支援が掲げられているものの、孤独や孤立対策や社会的なつながりを意識した取り組みはない。

地域福祉の面では、2020 年 4 月から三鷹市地域福祉コーディネーターによる共助支援事業が開始され、現行の制度や公的なサービスでは対応できない制度の狭間にある課題や、高齢・障がい・生活困窮・子育てなど多分野にまたがる複合的な課題についてワンストップで受け止め、課題を抱える世帯に継続的に寄り添い伴走しながら支援を行い、様々な関

係機関・団体と連携して課題の解決に取り組むとされ、2024年市内7地区に各1名の地域福祉コーディネーターを配置する予定となっている。¹

筆者の課題意識として、このような社会背景において三鷹市においてももっと芸術文化を活用し、望まない孤独や孤立の対策として地域のつながり、文化施設をもっと活用していくべきではないか、市民の多くが社会のつながりをつくる担い手として活躍し、三鷹市内の文化施設にもまちの核となり、より多くの市民が集い、交流するような場になるべきではないかと考えたことが社会的な研究の背景である。

6. 研究方法

(1) 文献調査による先行研究の検討

(2) アート・コミュニケーターとのグループワークへの参与観察とヒアリング

7. 結果と考察

(1) 文献調査による先行研究の検討と用語の定義

① 社会課題としての孤独孤立と社会的つながりに関する先行研究の検討

医学博士でもあるヴィヴェック・H・マーシーは、さまざまな場面で、難しい境遇にある個人や家族やコミュニティに対して社会的なつながりが大きな役割を果たす様子を見てきたとし、孤独感は深い悲しみやさらなる孤立を生む一方で、人とつながり合うことは気持ちを前向きにし、創造力を高め、互いが互いのためにいると感じているとき、人生はより盤石に、より豊かに、より生き活きたものになると述べている。²

また、人間同士のつながりが強まると、私たちはより健康になり、レジリエンスが高まり、生産性が向上し、より生き活きとした創造が可能になり、充実感も高まっていく一方で、現在の私たちが個人としても社会としても抱えている重大な問題の多くに対処していくにあたり、社会的なつながりという要素はほとんど認識も評価もされていないとして、孤独を乗り越え、よりつながりのある未来を築くことは、私たちがともに取り組むことができ、ともに取り組まねばならない喫緊の任務であるとしている。³

一方で、エリック・クリネンバーグは、人々の交流を生む物理的な場や組織であるとして社会的インフラに注目し、社会的インフラは、「社会関係資本」(人間関係や人的ネットワークを測定するときに使われる概念)とは異なるけれど、社会関係資本が育つかどうか

¹ 令和5年度『三鷹市地域福祉コーディネーターによる共助支援事業』事業報告書

² ヴィヴェック・H・マーシー『孤独の本質』樋口武志訳.英治出版,2023,pp.24.

³ ヴィヴェック・H・マーシー『孤独の本質』樋口武志訳.英治出版,2023,pp.30-31.

を決定づける物理的条件だとして、強力な社会的インフラが存在すると、友達や近隣住民の接触や助け合いや協力が増える。逆に、社会的インフラが衰えると、社会活動が妨げられ、家族や個人は自助努力を余儀なくされるとして、社会的インフラというハード面の重要性を説いている。⁴

このような社会的つながりの重要性、そしてそれを醸成する社会的インフラの重要性が示されてきた中で、「孤立という病を地域のつながりで治す方法」として社会的処方という概念を示しているのが、西智弘である。

西は、社会的処方が国の施策に取り入れられたことで、孤独・孤立に対する専門機関や法律が制定され、モデル事業への取組も着々と進んできたことは喜ばしいが、一方で健常者が社会的弱者へ施すのが社会的処方であるといったような誤解も耳にするとして、あらためて社会的処方が決して、社会的弱者を救ってあげようという上から目線の押し付けではなく、その基本的理念である「人間中心性」「エンパワメント」「共創」の3要素が示すように、病気や障害があってもなくても、子どもから高齢者まで、誰しもが自分の『やりたい!』を自由に表現でき、それを実現できるような環境を平等に享受できるようにみんなで取り組んでいく仕組みとしている。さらに多くの人たちが気ままに自然に「自分のできること」「自分がやりたいこと、好きなこと」を持ち寄って、お互いに「いいね、いいね!」とつながっていく先に、孤独・孤立の解消があると述べている。⁵

社会課題としての孤独や孤立の問題に対して、国としての施策が進む一方で、孤独や孤立は社会的弱者だけの問題ではなく、健常者を含めた社会全体で取り組むべき課題であること、小さな実践の積み上げが大切であることが示唆されている。

このような示唆を踏まえて、本研究では、フィールドワークの実施、そしてそれらへの参与観察とヒアリングを研究方法として実践する。

② 文化施設における社会的処方と対話型鑑賞に関する先行研究の検討

西智弘は、2019年世界保健機関（WHO）が『健康とウェルビーイングの向上におけるアートの役割についてのエビデンスとは?』というレポートを発行し、3000を超える研究を通して、病気の予防、健康の増進、疾病の管理・治療において、アートが大きな役割を果たすことが明らかになった、と結論付けていると紹介している。北欧をはじめ EU 諸国、英国、オーストラリア、ニュージーランド、米国、カナダ、シンガポール、台湾などの地域で、アートや文化活動は非医療的な介入の重要な社会資源と捉えられていること、具体的にはクリエイティブ・ヘルスと呼ばれるような地方自治体でのアートや文化を活用する施策の推進や、薬の処方よりも地域社会活動への参加を促す「社会的処方」としてア

⁴ エリック・クリネンバーグ『集まる場所が必要だー孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』藤原朝子訳.英治出版.2021.p18.

⁵ 西智弘『みんなの社会的処方ー人のつながりで元気になる地域をつくるー』学芸出版社.2024.pp5-6.

ート分野の実績が進んできていると述べている。⁶

また、国際社会の潮流から見ると日本国内の現状は 20 年ほど立ち遅れている状況に見えるが、活動の芽はあるとして、2023 年に始まった東京藝術大学を拠点に大学、国立美術館などの文化施設、民間企業、福祉医療セクター、自治体など 39 の組織が共創する「アートコミュニケーション共創拠点事業」が取り組む「文化的処方」やその源泉として、東京藝術大学と東京都美術館が広く一般から集まったアート・コミュニケータが専門家とともに美術館を拠点に、そこにある文化資源を活かしながら、人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動「とびらプロジェクト」をどちらも同じ潮流にあると紹介し、それは成熟した民主的な社会で、異なる多様な人々とのウェルビーイングな共生の仕方を模索していく、市民参加型社会への動きと述べている。⁷

さらに、アート・コミュニケータとの対話を通した作品鑑賞については、聞き合うこと自体で、お互いにケアされている感覚を得ることができること、美術館にある作品や文化財は、社会の中で共同して持っている宛先のない贈与（ギフト）ともいえること、作品に深い関心を向け、またそれについての意見に関心を向け、時間をかけて語ること自体が、お互いへの贈り物を送るような、与えあう関係になるのが、対話を通した鑑賞の不思議な効用と述べるとともに、このような活動を通じてアートや文化活動の健康に資する社会的価値の認識が広まり、今後様々な形で、多くの人が関わっていけるようにすることが今広く求められていると結論づけている。⁸

対話型鑑賞が公共施設としての美術館でどのような効果をもたらすかについての議論もある。独立行政法人国立美術館主任研究員の稲庭彩和子は、対話型鑑賞プログラムが実践されてきた 30 年を「美術館は誰にも開かれている場」である必要性がより意識されてきた 30 年だったとした上で、対話を伴うことで「作品鑑賞が深まる」「創造的な鑑賞ができる」という直接的な意味だけでなく、文化的な権利の問題でもあったと述べている。20 世紀後半の脱植民地主義的な流れと人権問題が意識される中で、美術館側の開かれた対話の場というのが国際的には重視されてきたことや 2000 年代に入ると美術館は単に分け隔てなく平等に開かれた場になるだけでなく、個人差を考慮し、配慮する工夫を行なう公平な場としていく意識が醸成されてきたと説明した上で、公共的な場である美術館における対話型鑑賞は作品世界をどれだけ深く理解できるかということの重要性はありながらも、その前提として、「作品を尊重するとともに、それを見ているあなたも同じように尊重される」というような社会的参加の場を美術館で実現することこそが重視されてきたのではな

⁶ 西智弘『みんなの社会的処方－人のつながりで元気になる地域をつくる－』学芸出版社.2024.pp149-150.

⁷ 西智弘『みんなの社会的処方－人のつながりで元気になる地域をつくる－』学芸出版社.2024.pp151-155.

⁸ 西智弘『みんなの社会的処方－人のつながりで元気になる地域をつくる－』学芸出版社.2024.pp162-163.

いかと話した。⁹

山口情報芸術センター[YCAM]エデュケーターの原泉は、稲庭のいう心理的な安全が確保された場に加えて、相手を肯定するに留まらず、安心して反対意見を言えたり、臆さずに相手に疑問を投げかけたりできる場が公共性を実現するキーであるとして、公共施設である美術館にできることは、多種多様な人の意見を受け入れることだけではなく、理解の及ばない他者と同じ場にいる意味はどんなことだろうと「ともに考える」機会をできるだけ多く作ることかもしれないと述べている。¹⁰

豊田市民芸術館館長の都築正敏はふたりの議論に加えて、公共の場である美術館で作品を介して行われる対話の営みは、単に「作品鑑賞が深まる」だけにはとどまらず、社会や日常、他者との向き合い方にも有用な気づきを与えてくれると話した。¹¹

西は、世界的な流れとして、アートを活用した社会的処方が進んできていること、国内においてもそういった活動の芽はあり、対話型鑑賞などアートを介したコミュニケーションを示すとともに今後様々な形で多くの人が関わっていくことが求められていると示唆している。公共施設としての対話型鑑賞の効果についても、単に鑑賞プログラムに留まらず、社会参加の場の実現や、共に考える機会、他社との向き合い方に有用な気づきを与えろといった議論が行われている。

こういった示唆や議論を踏まえて、本研究においては、アート・コミュニケータとして活動経験のある市民6名にモニター兼調査協力という形で参加していただき、三鷹市の文化施設をフィールドワークしながら、三鷹市でのアートを介したコミュニティの形成の可能性について考察する。

③ 用語の定義

なお、本研究において、アートコミュニケーションは、「とびらプロジェクト」で定義されている人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動を参照し、広く対話を通じて、人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動全般と定義するとともに、その担い手としての個人をアート・コミュニケータと表記する。

⁹ 福のり子・北野諒・平野智紀編集 京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター監修 第二章執筆原泉『ここからどう進む？対話型鑑賞のこれまでとこれからーアートコミュニケーションの可能性』淡交社.2024.pp50-51.

¹⁰ 福のり子・北野諒・平野智紀編集 京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター監修 第二章執筆原泉『ここからどう進む？対話型鑑賞のこれまでとこれからーアートコミュニケーションの可能性』淡交社.2024.p53.

¹¹ 福のり子・北野諒・平野智紀編集 京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター監修 第二章執筆原泉『ここからどう進む？対話型鑑賞のこれまでとこれからーアートコミュニケーションの可能性』淡交社.2024.p54.

(2) アート・コミュニケーターとのグループワークへの参与観察とヒアリング

三鷹市の文化施設におけるアートを介したコミュニケーションの可能性について実地調査を行うために、アート・コミュニケーターとして既に活動実績のある市民 6 名にモニター兼調査協力として参加していただき、グループワーク、フィールドワークを実施した。

【実施概要】

日時：2024 年 12 月 14 日土曜日 10 時～16 時

会場：三鷹産業プラザおよび三鷹市美術ギャラリー、三鷹市山本有三記念館、三鷹市立アニメーション美術館

① 三鷹産業プラザでのグループワーク

はじめに、アイスブレイクとして、本研究におけるアートコミュニケーションおよびアート・コミュニケーターの定義を共通認識として持つべく、哲学対話を実施。

参加者各人のこれまでの活動に加えて、それぞれが思うアートコミュニケーションについて、アートコミュニケーションとコミュニティ形成の可能性、望まない孤独や孤立を解消する文化的処方、社会的処方について話が進んだ。

結論を出さない哲学対話であるが、三鷹市ならではのワークを意識し、「となりのトトロ」に登場する“まっくろくろすけ”をコミュニケーションボールとして活用するなど工夫した。



〈グループワークの様子〉（筆者撮影）

続いて、三鷹市美術ギャラリー、三鷹市山本有三記念館、三鷹市立アニメーション美術館については、アートカードや図録等の参考資料を用意するとともに、三鷹市スポーツと文化財団の配信動画を活用した。それぞれの文化施設へフィールドワークを実施するにあたって、アクセシビリティ×三鷹市美術ギャラリー、建築×三鷹市山本有三記念館、鑑賞×三鷹市立アニメーション美術館とそれぞれテーマを設定し、事前学習を実施した。

三鷹市美術ギャラリーではアクセシビリティをテーマに、事前学習として、三鷹市美術ギャラリーとして、同施設ウェブサイトに掲載されている動画の鑑賞を行なった。同施設の太宰治展示室「三鷹の此の小さい家」については、展覧会の関係上、鑑賞に訪れた日は休室となっていたが、室内の様子やコンセプトは事前に共有できた。実際の部屋を再現展示されていて見学できることへの関心も高く、「外套を着用し机での執筆体験は、とても興味深いです。」といった声も聞かれた。

三鷹市山本有三記念館については、建築をテーマに事前学習として同館ウェブサイトに掲載されている動画の鑑賞を行なった。参加したアート・コミュニケータの中には建築ツアーガイドを行なった経験がある方も多く、細部までこだわられた建築について、動画も分かりやすくつくられており、興味をよりもって向かうツールとしても好評であった。

鑑賞をテーマとした三鷹市立アニメーション美術館については、上映されている短編映画「パン種とタマゴ姫」の鑑賞にあたり、ピーテル・ブリューゲル「穀物の収穫」のポスターを準備して、対話型鑑賞を行なった。



〈準備した昨品ポスターと対話型鑑賞の様子〉（筆者撮影）

対話型鑑賞を行う時点では、この作品と三鷹市立アニメーション美術館の関係性を事前情報として伝えるわけではなく、まずは純粋に作品に向き合ってもらった。一人ひとりの人物の表情や様子に着目した対話から物語が生まれ、服装の色など共通項目に話が進んだと思えば、季節や天候、背景に広がる街並みや遠景の海までこの街の暮らしぶりが想像されるなど、対話が留まることなく、「あっという間の時間だった。」と好評だった。

また、短編映画の制作時の迫体験として、ヴィヴァルディのラフォーリアを聞きながら、作品と向き合う機会を設けた。音楽を聴いて改めて絵画作品を見つめる様子なども参加したアート・コミュニケータからは観察できた。

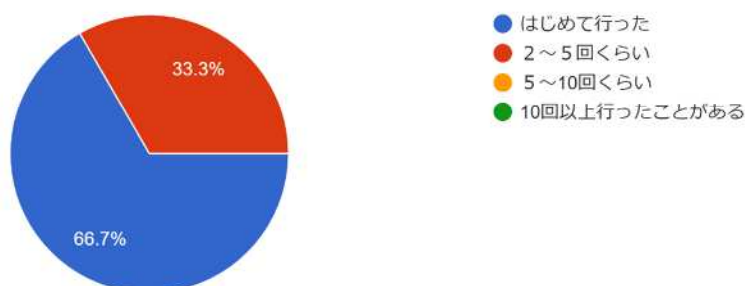
最後に事前に用意した図録、パンフレット、アートカードを見てもらいながら、改めて美術館へのモチベーションを高めて、三鷹産業プラザでのグループワークを終了した。

昼休憩を挟んで、午後からは三鷹市美術ギャラリー、三鷹市山本有三記念館、三鷹市立アニメーション美術館へフィールドワークに出かけた。

② 三鷹市美術ギャラリー

三鷹市美術ギャラリーの来館回数

6件の回答



〈参加者の声〉

- ・ 駅前にある立地の良さが魅力的です。建物の外観からは想像できない程、ギャラリーは落ち着きがあり企画展示も個性的で、鑑賞を楽しめました。(当日は) 太宰の家が閉館だったので、是非拝見してみたいです。
- ・ 入り口の印象に比べて、広い空間だったので驚きました。駅すぐに公立美術館があるというのは、活用しやすくて良いと思います。一方で地域に慣れていないと、その場所に気づかないかもしれません。わかりやすく、思わずたちよりたくなる案内があるといいなと思いました。
- ・ 気軽に立ち寄れる敷居の低い地元の美術館という感じだった。テーマもわかりやすく、あれこれ作品を見比べながら楽しく鑑賞することができた。ビルの上の階にあるため、外から見て少し見つけにくい感じもした。
- ・ とても便利な場所にあって、企画展示もよいものがたくさんある印象です。ただ、多くの方々に知られていない感じがして、少し残念です。
- ・ 街並みや史跡が素敵で良い立地なので訪れやすい。
- ・ 初めて行きました。あれほどの駅の近くに公立の美術館があるのは驚きました。ビルの上の方なので閉鎖的になってしまうのがもったいない。もう少しひらかれた工夫があるともっと良いと思いました。

主にアクセシビリティの視点で見てもらい、参加者からは概ね、「あれほど駅の近く」、「とても便利な場所」、「立地の良さが魅力的」「訪れやすい」というように立地の良さには高い評価がある一方で、「見つけにくい」、「閉鎖的」、「地域に慣れていないと気づかない」といったわかりにくさについて課題が指摘された。

三鷹市市民文化祭や、最近ではアール・ブリュットみたかの開催など、市民のまちのギャラリーとしての存在感も増す一方で、見つけにくい、閉鎖的といった印象は好ましい状況とは言い難い。今回の参加者に三鷹市民はいなかったが、三鷹市民の中でも三鷹市美術

ギャラリーを訪れたことがない、もしくは存在すら知らないという人もまだまだ多いのではないと思われる。せっかくのこれだけ恵まれたまさに駅前にある公立美術館として、もっと存在感を高める、認知度をあげていく施策があれば、現状届いていない層にもアクセスできるのではないだろうか。

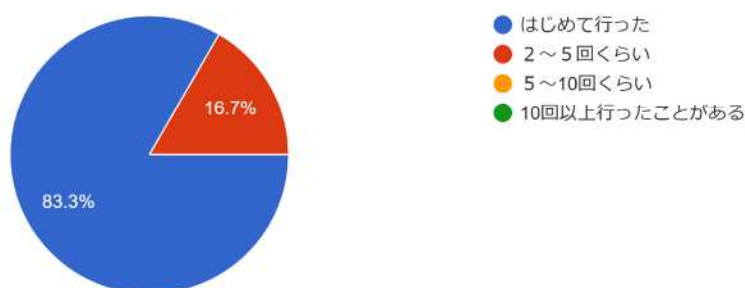
フィールドワーク中には、エレベーターで直接美術館の入り口まで迎えることから、「車いす利用者でも利用しやすそう」、「(1フロアのため) 高齢者でも歩くのはそれほど大変ではない」という声も聞かれた。

好立地に加えて、設備的にも小さな子どもから高齢者まで多世代の利用が障害なく期待でき、そういった意味でも、より多くの市民に存在が認知され、多くの市民が参加する文化活動を行いやすく、またそういった機会を創造できるようなアート・コミュニケータの役割を発揮できる余地が大きいと考えられる。

③ 三鷹市山本有三記念館

山本有三記念館の来館回数

6件の回答



〈参加者の声〉

- ・文化施設といえ、アート、文学、建築、庭園、歴史、自然と、様々な要素があり満喫できました。建築は細部までこだわりが見られ、外観も室内もどこも見所ばかりで素敵でした。特に入ってすぐにある暖炉の部屋と、シンプルなステンドグラスに、赤い絨毯の階段が好きです。(三鷹市スポーツと文化財団の) 映像を見てからうかがったので、建築をより楽しめました。また、触れて良い箇所が多いのも、感覚と共にタイムスリップするような、素敵な時間を過ごせました。ガイドの方やスタッフの方も親切で、対話が楽しかったです。アニメのスタンプラリーも意外性があり、面白かったです。
- ・(当日は) 1階はイベント中で見られず残念！またトライしたいです。館内のガイドの方々がとても親切で、ありがたかったです。山本有三のことをあまりよく知らないまま訪れてしまいましたが、色々説明してくれたのでたのしめました。純粋に建築として魅力的です。また違う季節の景色も見たいなと思いました。

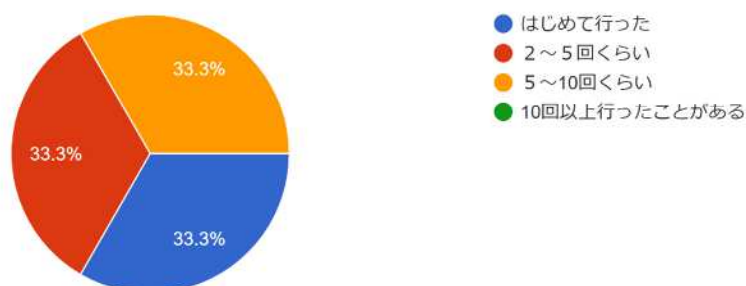
- ・本当にとっても魅力的な建築物だった。あんなにこだわった造りをしているのに建築家がわかっていないということから 難しいウンチクではなく、そこに住んでいた人のことを想像できた。公式に紹介されているものだけでなく実際に行ってみると気になる個人的に箇所が沢山あり、訪れる人によって広く想像が膨らませることができると思った。周りの自然環境もよく、季節によって違う顔を見せてくれるのだろうかと思った。
 - ・いつも外から眺めてお庭を少しまわる程度で、中に入ったのは初めてでした。意匠をこらした内部は美しく、スタッフの方々の説明によりさらに建築や内装の魅力を感ずることができました。
 - ・庭の面積がアメリカの1エーカーと似ていて、昔の生活を偲ばせる広さは日米で共通しているなあ、と感じた。
 - ・建物は窓や柱、床など細分の造作がとて手がかんていて素敵でした。庭も広くて造園もよくて四季をとおしてくつろげる場所だと思いました。(庭の鑑賞には) 入場料がかからないので自由に入れるのはとてもいいですね。東屋でベビーカーを揺らしながらくつろぐ女性がいたのが印象的でした。名建築もいちど壊してしまえばおしまいなので、使いながら残していくのはこれからも大事なことだと思います。
- 山本有三と聞いても正直あまり知らなかったです。ですが記念館の建物がすばらしくて、逆にそこに住んでいた人はどういう人だろうと関心がでてきました。

三鷹市山本有三記念館 HP にある動画鑑賞を事前の足掛かりとして、建築的な魅力に注目して率直な印象を聞いた。当初は、アート・コミュニケーターとして建築ツアーのような活動のイメージが浮かぶのではないかと仮説を持っていたが、当日たまたま訪問した時間に建物内でボランティアガイドによる解説（土・日・休日の午後1時～午後4時に解説を行っている。事前申し込み不要）が行われており、多くの参加者からもガイドやスタッフの説明でより鑑賞が深まったという声が聞かれた。また、庭園も含めた景観としての魅力や季節ごとに違った景色が見られるのではないかとといった視点もあり、「建物内に特化するのではなく、周辺環境も含めて建築ツアーを提案できるのではないか」という声もあった。当日もイベントを行っていて、1階フロアは見学不可となっていたものの、建物の雰囲気は存分に見学したアート・コミュニケーターには届いている印象だった。それを補っていたのがボランティアガイドであり、市民参加はもっとこの文化施設の魅力を発信できる一助になりそうな印象をもった。

④ 三鷹市立アニメーション美術館

三鷹の森ジブリ美術館の来館回数

6 件の回答



〈参加者の声〉

- ・ ブリュッゲルの作品を鑑賞し、音楽を聴いてから訪館したため、ミニシアター作品をより深く観ることができました。場所は離れていましたが、鑑賞する事で、ジブリ美術館に向かう気持ちになりました。また、はじめに鑑賞をし、対話型美術鑑賞をしたため、他の参加者との関係ができ、心理的安全性が担保された状態で、美術館に行ったので対話が弾みました。美術館でも作品や建物の一つ一つを丁寧に観て感じて対話から、新たな発見をし、存分に楽しめました。
- ・ VTS（対話型鑑賞）後に「パン種とたまご姫」をみることで、どちらの作品もより立体的なものになり、びっくりしました！まるで作品の中に本当に自分も入り込んでしまったよう。前情報がない状態で VTS（対話型鑑賞）をしたからこそ、先入観なく楽しめたのだと思います。ブリュッゲル、宮崎監督それぞれの生み出した作品の力も大きいですが、このような鑑賞体験をまた是非味わってみたいです！
- ・ 何度も予約が取れずやっと思行かれた。そのため、とても新鮮な感動を味わえたと思う。ただ行くだけであると、好きなアニメのキャラクターに会えた喜びや、仕事場を見られたことの感動だけで終わりそうであるが、上映に関しては事前に勉強をしたことで、発見や感動、好奇心が倍増した。この絵画からあのアニメーションを生み出す想像力に感動し、絵画との共通点を色々発見するたびに嬉しかった。
- ・ 東京都写真美術館でソーマトロープを始めとしたアニメーションの展示をしていて観ていたので、館内の展示物により興味が湧いた。今、技術も進んでいるが、だからこそアニメーションの原点を見ることができる場所は大事ななのかもしれない。
- ・ ジブリ美術館はアニメーションのイメージが大きい建築や展示、どれにも細やかな工夫がされているのでジブリファンでなくても色々楽しめると思う。例えば、形探し、とか？キャラクター探しとか？ただ混み合っているので VTS など場所の取れるところなのか？の問題はありそうだと思う。ジブリ美術館に関しては予約を

やっと取れた、という感覚もありそうなので、何かみんなの知らないことを持ち帰れると興味もさらに湧き、満足感も増えそうなので、今回のようにアニメーションの元になっている絵画の鑑賞などはとても良かった。

- ・事前にブリューゲルの「穀物の収穫」を対話型鑑賞してから行ったのはよかったです。それ自体も仲間達といろいろな見方をして楽しめましたし、映画「パン種とタマゴ姫」は初めて観たけど、シーンの背景や物語の解釈の違いなど深く味わいながら観ることができて楽しさ倍増です！絵画を楽しむことと映画を楽しむこと。両方できたのは対話型鑑賞をしたおかげですね。ジブリ美術館は3度目ですが、今回がいちばん楽しかったです。
- ・事前にブリューゲルの「収穫」で VTS（対話型鑑賞）を行った後で、短編映画をみるという流れはとても良かったです。絵画からインスピレーションを得て作られたという動画をみる際、あらたな視点をもらったと思いました。
- ・映画鑑賞にあたり、原作のタネでの VTS を経て上映作品を鑑賞できた事が意義深く、美術館の楽しみ方が自分の人生に確実に増えたと思う。

三鷹市立アニメーション美術館については、今回鑑賞をテーマとして、特に映像作品鑑賞における事前のウォーミングアップを行なった。今回の三つの文化施設のうち、一番多くアート・コミュニケータである参加者が事前に来たことがある施設であったが、特に今回の事前の対話型鑑賞や音楽鑑賞が強く印象に残り、「3度目ですが、今回がいちばん楽しかった」、「上映作品について発見や感動、好奇心が倍増」などの意見が聞かれ、より豊かな鑑賞体験として持ち帰ってもらうことができた印象を持つことができた。

映像作品に限らず、「他の参加者との関係ができ、心理的安全性が担保された状態で、美術館に行ったので対話が弾みました」という感想も印象的だった。実際に館内見学の際も、想像していた以上に見学中にも参加したアート・コミュニケータ同士の対話が進んだ。

参与観察中には、美術館の雰囲気についての感想も聞く事ができた。当日は土曜日で混雑もしていたが、それでもあまり窮屈な印象がないといったことや、順路がないので、他の美術館のように人垣のような列ができ、作品が見えにくいといったこともなく、空間としても居心地の良さを感じる言葉が多く聞かれた。また、いい意味で美術館ばさがなく、静かにしなければいけない、会話が難しいといった制約がないので、対話がしやすくコミュニケーションできる場所としての魅力は多くのアート・コミュニケータが実感していた。

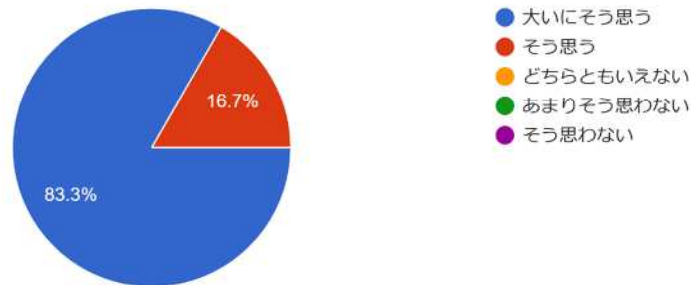
最後に、当日一日の振り返りとして、感想や三鷹市の文化施設の印象を聞いた。

量的調査としては母数も少なく、参考程度であるが、当日のグループワーク、フィールドワークは概ね支持された。

質的な調査として、事後アンケート調査による参加者の声はなるべく原文を維持して記録することを重視した。

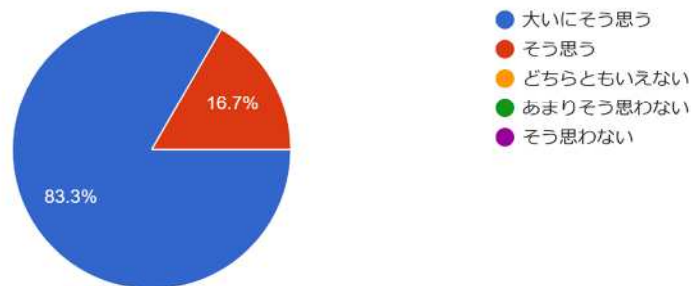
本日のようなアートコミュニケーションは文化施設の鑑賞体験をより豊かにできると思うか？

6件の回答



三鷹市においてアート・コミュニケーターが活躍できる場があると思うか？

6件の回答



〈参加者の声〉

・素晴らしい環境に、文化施設が点在し、社会資源を守り発信していこうとする三鷹市の考えを感じる事ができました。特にジブリ美術館は、それだけで特別な場所なので、アニメファンが来館すれば十分に楽しめますが、だからこそ、アート・コミュニケーターが介在し、よく観て感じ対話をし、互いの考えを共有する事で、ジブリ作品の奥深さや、多様な捉え方を残した作品をより楽しめるかと思います。また、毎回、タイミングやメンバーにより、違う捉え方ができそうです。ジブリ美術館だけにしか寄らないような方も、今回のようにアート・コミュニケーターが介在し、三鷹市の他の文化施設を含めたアート散歩にする事で、街を楽しみながら知る事ができます。吉祥寺駅からは無く、三鷹駅を使いまた足を運ぶ方が増えると良いです。アート・コミュニケーターが介する大きな理由は、初めて集まった方々をつなぎ、安心できる場所だという認識共有の中で、活動ができる事にあります。全ての場所の知識を覚えて伝えるのでは無く、その日その場に集まった人が、対話をしながら、新たな発見や楽しい時間を過ごすお手伝いをします。楽しい体験をした方が、また集まり三鷹市に、インクルーシブな感覚を持った市民が増えつなげていくと、より素敵な街になると思います。

- ・ VTS と映像作品をブリッジして味わう体験は、本当におもしろかったです！作品を介して絵の中に入り込む体験は、ジブリ美術館の「迷子になろうよ、いっしょに」というコンセプトを彷彿とさせました。昨今は、イマーシブルミュージアムのように、没入型の体験がはやっていますがどうにも味気ないと私は感じます…今回の体験は、自身の想像力と（誰かと）話すことで広がる創造力が重なり、よりたっぷりと作品の中に入り込むことができたと感じています。そこにアート・コミュニケータがいて、アートコミュニケーションが自然に発生したからこそ、より味わえたのかもしれない。三鷹市の多様な文化施設・文化資源には、アートコミュニケーションを広める・深める可能性がたっぷりあると思います。私自身もまたなにか携われたら嬉しいなと感じました。
 - ・ より市民的というか家庭的？人の温もりが感じられる場所ばかりだと思った。身近に普通に存在し、ふらっと誰かの家に遊びに行く感覚で行かれる場所だと思う。山本有三邸の庭ではベビーカーに赤ちゃんを乗せた女性がのんびり本を読んでいて、それを邪魔するものは何一つなくいい空間だと思った。周りの自然や生活の一部となっていた。建築物は外も中も魅力的で建築ツアー的なものは沢山考えられそうだなと思った。
 - ・ ジブリ～はアニメーションのイメージが大きいけど建築や展示、どれにも細やかな工夫がされているのでジブリファンでなくても色々楽しめると思う。例えば、形探し、とか？キャラクター探しとか？ただ混み合っているのも VTS など場所の取れるところなのか？の問題はありそうだと思う。ジブリに関しては予約をやっと取れた、という感覚もありそうなので、何かみんなの知らないことを持ち帰れると興味もさらに湧き、満足感も増えそうなので、今回のようにアニメーションの元になっている絵画の鑑賞などはとても良かった。3箇所それぞれの場所に特徴があるので、アートコミュニケーションも幅広く考えることができると思う。
 - ・ 今回3つの文化施設を通して見学したことで、三鷹の文化資源と自然資源両方の豊かさに改めて気づかされました。文豪がこの地に暮らした息吹を感じられ、さらにジブリ美術館では、今を生きるクリエイターらの圧倒的な創作エネルギーを感じられました。
 - ・ 音楽をベースとしたアーティストの作品が、それでもやはり美術作品と捉えられる事は何故か？気になる。
 - ・ 初めに、施設の動画をみたり、音楽を鑑賞したり、ブリューゲルの作品で VTS をしたのもとても良かったですね。それがなければただの鑑賞でおわっていたかも。それはそれで楽しいですが今回のように深く味わうまでいけなかったと思います。それぞれはじめての施設でしたがあらかじめ知っている場所のように感じられ、興味もわきました。みんなと回れたことも良かったです。
- 訪れた施設もよかったですが、移動中に話しのでた玉川上水のことや太宰治のこと

など三鷹の文化のことが身近に感じられた1日でした。

対話・絵画・アート・建築・映像・音楽とアートを介したコミュニケーションはジャンルを問わず成り立つのだなあと実感しました。その繋がりを作るのがアート・コミュニケーターなのですね！とても勉強になりました。

あらためて、本研究の主題「地域における公立美術館についての市民の受容とコミュニティ形成の可能性」に立ち返ると、三鷹市の文化施設それぞれについて、アート・コミュニケーターとして活動実績があり、人と作品、人と人、人と場所をつなぐ役割を実践している市民から、文化施設の魅力と共に、アートを介したコミュニケーション、地域の中でコミュニティを形成する可能性について好意的な意見が多く聞かれた。

今回は限られた鑑賞時間で、半日で3か所の文化施設を周った為に、それぞれの文化施設について詳細を把握したわけではないが、その中でも参加してくれた市民の多くが、アートを介したコミュニケーションがより豊かな鑑賞体験につながることを実感したこと、また三鷹市において、より“アートコミュニケーション”が市民の中で文化として広まっていくことができれば、既存の文化施設をより有効に活用したり、その中でつながりやコミュニティが生まれるきっかけになるだろうという萌芽は示すことができた。

本研究の背景として、社会課題としての望まない孤独や孤立を取り上げたが、既存の文化施設をより有効に活用していくこと、その中心に対話やコミュニケーションがあることは、小さな一歩かもしれないが、着実にコミュニティの形成につながったり、障害の有無に関わらず、全ての人たちが孤独や孤立を抱える可能性がある現代において、まちづくりとしてもより重要視されるべきであると考えている。

今回取り上げた3つの文化施設以外にも、三鷹市には数多くの文化施設があり、そういった場所でも、市民がつなぎ手となって活動できる環境をつくっていくことができれば、三鷹市の学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動に寄与できる。

8. 結語

アート・コミュニケーターとして活動経験のある市民からは、多くの新鮮な意見をもらうことができた。三鷹市の文化施設でのアートを介したコミュニケーションには多くの可能性があり、望まない孤独や孤立を解消する手段としての文化施設の活用を期待できる。

しいていえば、調査対象者をさらに増やせたらより多様な意見にアプローチできた。予算の制約もあり、多めに参加者を募ることができない中で、季節的にもインフルエンザ等流行もあり、直前で参加できなくなったアート・コミュニケーターが出たことが残念である。また、純粹に三鷹市民の反応を聞いてみる機会があってもよかった。

最後に、まとめとして、文献調査でも少し示しているが、アートを介したコミュニケーションの広がりについて、示したい。

① 京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター

公式ウェブサイトによると、京都芸術大学が 2004 年度から展開する対話型鑑賞教育プログラム「ACOP／エイコップ (Art Communication Project)」を広義のアート・コミュニケーションと捉え、人が人との間で生きていくために最も重要な要素であるコミュニケーションのあり方・育て方について美術教育の現場から問い直すことを設立趣旨に掲げ、アートの可能性を多角的に探る研究活動を担う機関として、ニューヨーク近代美術館で開発された鑑賞教育プログラム「VTC (Visual Thinking Curriculum)」を日本に紹介した対話型鑑賞の第一人者、福のり子氏（現・京都芸術大学名誉教授）を初代センター長に 2009 年 4 月に設立された。美術が社会の中で主体的に生きる人間を育てる教育ツールとしても有効であると考え、美術の分野からコミュニケーションの問題と「生きる力」の向上にアプローチしている。自立した鑑賞者・学習者の育成や私たちの考えるアートの普及促進を通じてアートの可能性を広げ、ひいては自らの力でみて、考えて、話し、聴くことのできる主体的な人材の育成に寄与していくとされている。¹²

同センターで、筆者が注目していたところは、研究センターという学術的な領域に加えて、研究者として様々な実践者が参加し、多様な参加者による幅広い実践と活動が行われているところである。筆者は、本協働研究の期間中、2024 年 11 月 12 日に京都芸術大学を訪れ、校内同センターの吉原氏、有光氏に話を伺った。



京都芸術大学（外観）と活動実績の展示（筆者撮影）

¹² 京都芸術大学アート・コミュニケーションセンターウェブサイト 設立趣旨より引用
<https://acop.jp/about/> （2025 年 1 月 15 日閲覧）

アート・コミュニケーション研究センターの活動は、美術館、博物館での教育普及や学校教育、企業内人材育成、組織開発、生涯教育学術研究等、多岐に渡る。

また、活動の領域も広く、一般財団法人おおさか創造千島財団が主催するオープンスペースでの対話型作品鑑賞プログラムの監修、国立京都国際会館での国際的なアートフェアである ACK (Art Collaboration Kyoto) でのガイドツアー、大阪府茨木市主催の対話型鑑賞プログラム「アートでおしゃべり」の監修など、様々な実践を展開している。

話を伺った研究員の吉原氏自身も、大阪府立江之子島文化創造センターのアートコーディネーターとして、美術コレクションを活用した出張型展示鑑賞授業「enoco コレクション・キャラバン」の鑑賞プログラムの設計やナビゲーターを担い、対話型鑑賞の実践を通してアートがまちづくりに有効であることを実践してきている。

また、京都芸術大学内においても、オンラインでの「大学生と学ぶ対話型鑑賞ファシリテーション講座」は広く一般に公募され、2024 年度は第 5 期生を迎えた。オンライン講座やファシリテーションの実践練習を行う定期練習会、SNS を活用した交流の場、オンラインコミュニティを提供しており、美術館や学校関係者だけでなく、医療やケアの現場など多業種、かつ大学生から定年退職後の方まで幅広い世代が交流する機会をつくっている。その他、京都芸術大学の現役の学生にも 1 年次に ACOP の基礎を学ぶ機会がある他、2 年次以降も ACOP を学ぶ選択肢があり、学生うちに大学での学びを実践につなげた成果を報告したものなど、拝見することができた。

② 東京藝術大学×東京都美術館「とびらプロジェクト」他

東京都美術館のリニューアルオープンをきっかけに 2012 年にスタートした「とびらプロジェクト」は、美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクトとして、広く一般から集まったアート・コミュニケータと学芸員、大学教員、第一線で活躍中の専門家がともにそこにある文化資源を活かしながら、人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動を展開している。¹³

「とびらプロジェクト」を起点に、日本各地で少しずつその活動は広がっている他、それぞれの地域でそれぞれのアート・コミュニケータがそれぞれのやり方で、人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動を展開していることが特徴である。

2024 年には、愛媛県、神奈川県川崎市でそれぞれアートコミュニケーション事業がはじまった。

「とびらプロジェクト」には、筆者自身も 2019 年から三年間アート・コミュニケータとして活動した。また、今回のフィールドワークに参加してくれたアート・コミュニケータ 6 名も、同プロジェクト出身でアートコミュニケーションの実践者である。

¹³ とびらプロジェクトウェブサイト <https://tobira-project.info/about/> (2025 年 1 月 15 日閲覧)



「とびらプロジェクト」ウェブサイトより引用¹⁴

アート・コミュニケーション事業としての活動の広がりだけでなく、アート・コミュニケーター個人レベルでは、日本各地で様々な活動に寄与しており、そこから生まれている価値は計り知れない。

③ 「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」

東京藝術大学が中核となり 41 機関が連携した「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」は、福祉・医療・テクノロジーを融合したアートコミュニケーションによって、誰もが「自分らしく」を実現できる共生社会を目指している。個々人が抱える諸課題や社会との関係性、地域の文化芸術資源や場所の特性などを踏まえ、アート活動と医療・福祉・テクノロジーを組み合わせ、その人がその人らしくいられるレジリエントな場所やクリエイティブな体験を創り出す。それによって、楽しさと感動を生み出し、心が解放され、人と人との緩やかなつながりや心地良いコミュニケーションを自然と発生させる。個人の対象には、活動する意欲や幸福感の増進および健康状態の回復・予防に係る継続的な効果を、面的な対象には、寛容性や包摂性の向上に係る効果を与えようとする手法・方法・システムを「文化的処方」として定義し、様々な社会実装プロジェクトを実践している。¹⁵

¹⁴ とびらプロジェクトウェブサイト <https://tobira-project.info/> (2025 年 1 月 15 日閲覧)

¹⁵ ART 共創拠点ウェブサイト <https://kyoso.geidai.ac.jp/index.html> (2025 年 1 月 15 日閲覧)



ART 共創拠点ウェブサイトより引用¹⁶

大学、行政、企業といった大きな枠組みがある一方で、「文化的処方」を体現するには、「文化リンクワーカー」という個々人の小さな活動の積み上げによって形成される。

福祉、医療、テクノロジーを融合したアートコミュニケーションと表現されているが、一人ひとりの対話やコミュニケーションによる力も大きい。

このように見てくると、近年特に、日本各地に広がるアートを介したコミュニケーションを社会課題の解決として実践に取り組む地域は増えてきている。そして、様々な取り組みが行われている中でも、中核には人と人とのコミュニケーションがあり、そのつながりを大切にしている趣は共通している。

一人ひとりのアートへの向き合い方、コミュニケーション手段としてのアートなど、地域社会の中で広く文化として拡張していくことは、本研究の背景として示した社会課題としての望まない孤独や孤立の解消を一步でも良い方向へ進められる機会である。アートを介したコミュニケーションがコミュニティ形成の可能性を広げ、文化施設がそうしたコミュ

¹⁶ ART 共創拠点ウェブサイト <https://kyoso.geidai.ac.jp/about.html> (2025 年 1 月 15 日閲覧)

ニティにとっての活動の場になることで、孤独や孤立の解消とともに、広く福祉の観点から文化芸術を活用していくきっかけになればと思う。

三鷹市においても、たくさんの文化施設がある。より多くの市民がコミュニティを育む場として活用され、文化芸術の場としての価値に留まらず、望まない孤独や孤立を少しでも解消するような様々な世代の人たちにとっての居場所になることを望みたい。

9. 今後の計画

本協働研究事業は、多くのアート・コミュニケーション実践者の言葉によって構成され、質的調査として一定の成果を得ることができた。協力いただいたアート・コミュニケータとは、引き続き三鷹市での活動のみならず、協働しながら、実践の場をつくっていかれたらと考えている。また、アートを介したコミュニケーションについては、筆者自身の専門領域である社会デザイン学としても学術的な学びも多い。アウトプットとして、論文や講演、講義など、機会があれば発信していけたらと考えている。

10. 謝辞

本協働研究の実施にあたり、協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。(敬称略)

・アート・コミュニケータ

卯野右子 大石麗奈 栗山昌幸 滝沢智恵子 安田宏 和田奈々子

・京都芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター

吉原和音 有光晴香

11. 参考文献

・ヴィヴェック・H・マーシー (2023), 樋口武志訳, 『孤独の本質つながりの力ー見過ごされてきた「健康課題」を解き明かすー』英治出版.

・エリック・クリネンバーグ (2021), 藤原朝子訳, 『集まる場所が必要だー孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学ー』英治出版.

・西智弘編著 (2024), 『みんなの社会的処方ー人のつながりで元気になれる地域をつくるー』学芸出版社.

・福のり子・北野諒・平野智紀編 (2023), 京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター監修『これからどう進む？対話型鑑賞のこれまでとこれからーアート・コミュニケーションの可能性ー』淡交社.